

# 縦断的会話データにみる日本語学習者の語用論的能力

## —不同意表明を対象とした予備的分析—

堀田智子(東北大学)

### 1. はじめに

第二言語（以下、L2）学習者の語用論的能力に関わる領域は、中間言語語用論<sup>1</sup>と呼ばれ、依頼や断りなどの発話行為を中心にその言語的特徴を記述し、学習者母語の影響を探る研究が数多く行われてきた。近年は、主にL2英語学習者を対象とした縦断的調査の結果から、留学期間中の中間言語の変化を記述する研究も盛んになっている。Taguchi & Roever (2017) によると、語用論的能力は、対象となる言語現象によってその習得過程が異なり、L2習熟度や社会的接触の密度 (intensity of interaction)、情意面など、様々な要因が複雑に関わるという。

不同意表明は、聞き手にとって好ましくない応答、つまり「非選好的応答」の1つであり、ためらいがちで念入りな発話とされる (Levinson, 1983)。対人関係に配慮した適切な不同意表明は、目標言語母語話者にとってはもちろん、L2学習者にとってはさらに難しい。会話の組み立て方が文化規範や目的によって異なるだけでなく、様々な言語的ストラテジーが使用されるためである (FitzGerald, 2003)。

L2日本語学習者を対象とする研究には、日中接触場面での不同意談話を考察した袁 (2021) や、習熟度との関連を検討したピナンソツティクン (2014)、学習者母語の影響を示唆した堀田 (2017) などがあるものの、その数は限定的であり、中間言語の一時点の記述にとどまる。そこで本研究では、縦断的調査を実施し、不同意表明にみられる言語的特徴の変化を探るとともに、習得に関わる要因として学習者をとりまく言語環境を検討した。本研究を通じて、語用論的発達過程の一端を明らかにしたい。

### 2. 研究方法

#### 2-1. 調査の概要と調査協力者

調査は、2019年10月と2020年2月の2回 (Time 1/2)、対面で実施した。毎回、筑波日本語テスト集 TBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese) の一部である SPOT90 Ver. 90 により日本語習熟度を確認した後、会話調査と自己報告調査 (次節にて詳述) を行った。

調査協力者は、国内の大学に在籍する日本語学習者 (NNS) 4名と日本語母語話者 (NS) 4名である。NNSの母語は混合 (中国語2名、イタリア語とドイツ語が各1名) である。全員が、1年間の短期交換プログラム留学生であり、調査開始時点での滞在期間は約1か月だった。NNSの平均年齢は22.5歳で、日本語を使用して就労した経験をもつ者はいない。日本語習熟度は、SPOT (90点満点) の平均点が、Time 1で65.0点 ( $SD=9.03$ )、Time 2で69.8点 ( $SD=4.81$ ) だったことから、中級レベル<sup>2</sup>と判断した。

#### 2-2. 調査方法

会話調査には、初対面のNNS1名とNS1名による合意形成型ディスカッションを採用した。ディスカッションに先立ち配布したタスクシート<sup>3</sup>には、砂漠に不時着した飛行機から取り出すべき5個のアイテムが書かれており、参加者はそれらの優先順位を話し合いながら結論を出すという流れである。会話時間は10分を目安としたが、結論がでたときに自由に終了するように指示した。会話中に適切な単語 (例: コンパス) が分からない場合には、辞書を使用するように教示した。

<sup>1</sup> 近年、特にL2英語を対象とする研究において「第二言語語用論 (second language pragmatics; L2 pragmatics)」を同義語として使用することもある。本研究では日本語教育関連分野において多用される「中間言語語用論」を用いる。

<sup>2</sup> 李ほか (2015) によると、56~80点が中級レベルであり、日本語能力試験のN2、N3レベルに相当する。

<sup>3</sup> タスクシートは、「砂漠で遭難した時」 (柳原, 2003) を参考に発表者が作成したものである。

自己報告調査は、言語環境を問うアンケートと半構造型インタビューから成る。前者では、Bardovi-Harlig & Bastos (2011) を参考に、1 週間あたりの日本語でのインプット及びインタラクションの時間数、母語以外に日常的に使う言語、日本人の親しい友人の有無、住環境について質問した。後者では、日本語使用場面の具体的内容や会話調査の感想、留意点、学習者母語話者と日本人の意見/反対意見表明についての類似点/相違点、知識などについて尋ねた。

### 2-3. 分析方法

収録した会話は、宇佐美 (2011) を参考に文字化作業を行い、分析データとした。全データのうち、対象とするのは、接触場面 8 会話 (4 会話 \* 2 回) での NNS の発話である。分析にあたっては、一連の会話から、Pomerantz (1984) にならい、話者の主観的評価 (assessment/evaluative statement) に対する不同意の発話 (群) を抽出後、相本 (2004) を参考に、不同意という発話意図の目的達成と対人関係配慮のストラテジーのラベリングを行った。

自己報告調査のうち、アンケートは、(直近 2 週間の) 1 週間あたりの時間を数値化し、平均値を算出した。その他は、参考資料とした。インタビューの回答は、質的に分析した。最後に、会話データの分析結果と自己報告調査の回答を総合的に考察し、不同意表明の変化と言語接触との関わりを検討した。

## 3. 結果と考察

### 3-1. NNS の不同意表明

以下では、適宜、会話例を示しながら、分析の結果と考察を述べる。発話内容のうち、\_\_\_\_\_ は不同意の効果的な伝達を目的とするストラテジーを、網掛けは対人配慮を示すストラテジーを、それぞれ示す。

NNS 4 名の不同意には、Time1, Time2 ともに、不同意をより効果的に伝えるストラテジー、特に反対の意思を予告する談話標識 (例:「でも」など) やその理由が複数使用されていた。断定的な反対意見 (例:「それはだめだ」) は、観察されなかった。また、発話冒頭での言い淀み表現 (例:「うんー」) やヘッジ表現 (例:「たぶん」「と思う」) によって、対人配慮も示されていた。

Time1 と Time2 間における変化の程度は個々の学習者によって異なるが、特徴的だったのは、不同意に先立つ肯定的な態度 (例:「そうですね、うん。」など) の提示や、事実や聞き手の発話意図の確認を目的とする質問などの対人配慮表現、ターン交替の増加である。

(1) と (2) は、中国語を母語とする NNS2 の断片である。(1) では、コンパスの重要性について話し合っている。NS2 (01 行目) は、「歩かない方がいい」と述べ、コンパスは不要だと暗示している。それに対して NNS2 (02 行目) は、「うんー」と言い淀み、後続する不同意を遅延させている。その後、「でも」と否定的なディスコースマーカを挿入したうえで、複数の理由を階層的に述べている。まず、「砂漠の夜は寒い」に「でしょ?」を後接させることにより NS2 の既有知識を想起した (ヘッジ表現付き理由①) 後、「一番重要なものは方向」(ヘッジ表現付き理由②) に「かな」を伴うことで押しつけを緩和させ、「方向が分かれば村や都市などに到着する」(ヘッジ表現付き理由③)、つまり脱出できる可能性が高まると述べている。

#### (1) NNS2 の断片 (Time1) 【コンパスの重要性】

| 番号 | 話者   | 発話内容  | ストラテジー   |
|----|------|---|--|
| 01 | NS2  | (略) コンパスは、なんだろう、こう、場所を知れるけど (うん)、その前に、こう、助けに来てくれるんじゃないかなって思って、自分たちで歩かない方がいいのかなって思いました。  |  |
| 02 | NNS2 | うんー、<br>でも、あの、さ、砂漠?、砂漠の夜は、なんか、寒いでしょう? (あー)、<br>だから、うんー、一番重要なものは、とりあえず、方向? (うんー)<br>かな、<br>うんー、なんていうかな、うんー、なんか、<br>自分の、あの、方位? がし、知ったら、たぶん、正しい方向に向いて、<br>そして、たぶん、あの、村とか (あー)、あの、都市とか到着できるか<br>もしれません。 | 言い淀み<br>ヘッジ表現付き理由①<br>ヘッジ表現付き理由②<br><br>ヘッジ表現付き理由③ |
| 03 | NS2  | うんー、そうですね…、(略)。   |  |

(2) では、パラシュートとピストルの優先順位について話し合っている。NS2 (01 行目) は、ピストルは最も役に立たない5番だと述べている。それに対しNNS2は、「うんうんうん」と肯定的な評価を示しているが、直後に「でも」を挿入し、ピストルの用途が複数あると、同意できない理由を説明している (02 行目)。 (2) には、(1) のようなヘッジ表現が用いられていないが、相手の意見を一旦容認することで、後続する不同意が緩和され、聞き手への配慮が示されている。

(2) NNS2 の断片 (Time2) 【パラシュートとピストルの優先順位】

| 番号 | 話者   | 発話内容  | ストラテジー              |
|----|------|---|---------------------|
| 01 | NS2  | なるほど、で、パラシュート…、なんかピストルがあるからなんかピストルが、例えばこれが、私も1番だったら、5番にできるけど。                                 |                     |
| 02 | NNS2 | うんうんうん、<br>でもピストルは、あの、いろいろな、なんか、使い方ができるし、<br>なんか自殺だけではなくて、あの、自分を守るために使えますよね、<br>あと <b>【</b> 。 | 肯定的評価<br>理由①<br>理由② |
| 03 | NS2  | <b>】</b> ま、そうですね。   |                     |

このように、Time1 から Time 2 にかけて、不同意の前置き表現として、聞き手への配慮を示す発話が挿入され、やや複雑なターン構成へと変化した。本結果は、Bardovi-Harlig & Salsbury (2004) および Taguchi (2012) が L2 英語学習者を対象とした調査結果を支持するものである。

### 3-2. 言語接触とメタ語用論的知識の変化

自己報告調査の結果、1 週間あたりの日本語使用時間は、10.0 pt. から 5.7pt. に減少することが明らかになった。全 NNS とともに、動画視聴を除く全ての項目で減少した。その理由として、留学開始に伴う事務的手続きが減ったこと、NNS 自身の学修時間の増加や常時忙しい様子の日本人学生への気遣いもあり、余暇時間を共に過ごすことが難しかったことを挙げていた。一方で、NNS は全員、日本語での専門科目や国際共修科目を通じて、限られた時間内で、日本語母語話者および日本語超級学習者と様々な活動を行っていることが分かった。

ディスカッション時に気をつけたことは、Time1 では NNS 自身の正しい文法や適切な単語 (例：コンパス) を用い、正確に自身の意見を伝えることへの回答が多かった。しかし Time2 では、それらに加え、失礼のない話し方や相手 (聞き手である NS) の反応についての言及が多かった。否定表現の回避やヘッジ表現の使用 (例：「ちょっと」「～と思う」) などメタ語用論的知識について具体的に述べる NNS もいた。

なかでも上記の会話例 (1) および (2) で挙げた NNS2 は、来日前から日本人学生との交流、日本語での動画視聴や SNS を通じて、若者言葉や会話の仕方 (原文ママ) に関心をもっていたという。日本語教室外での日本語の使用時間は、他の3名と同様に減少したが、平日は専門科目の学修に取り組み、休日は国際学生寮の日本語母語話者や日本語超級学習者と動画を視聴したりしながら楽しんだという。日本人の意見表明について Time1 では「賛成とも反対とも) はっきり言わなくて、色々な論点を述べる。」とのことだったが、Time2 では「否定の言葉は使わない。」「日本人は、反対意見を表明する際には「うーん、そうねー。でも私は〇〇と思う」のような感じで話します。」と、より具体的に述べていた。これらのことから、NNS2 は、日本語との接触時間は減少したものの、より密度の高い社会的接触を通じて、メタ語用論的知識を習得し、言語化するに至ったと考えられる。

## 4. おわりに

本研究では、縦断的会話データに基づき不同意表明の習得過程を分析し、言語接触との関わりを検討した。その結果、滞日期間が長期化するにつれて、個人差はあるものの、相対的に、対人配慮を示すストラテジーの使用が増え、それらを連鎖させることによって複雑な不同意表明になることが明らかになった。また、L2 でのインプットやインタラクションの時間よりも、むしろ、高密度な社会的接触が、メタ語用論的知識の向上を促進することが示唆された。

上述の結果は、不同意表明の習得において「言語の社会化 (language socialization)」 (Schieffelin & Ochs, 1986) が進む過程を示唆するものと言えよう。新参者 (novice) である日本語学習者が、熟練者 (expert) とのやりとりを

通じて、目標言語話者の意見表明を観察し、社会化が進んだものと思われる。言語社会化理論は、従来のL2日本語の第二言語習得研究において、スタイルシフト (Cook, 2008; 奥西, 2017) や終助詞 (Yoshimi, 1999) を対象とする議論が中心だった。本研究は、不同意表明の習得を説明する枠組みとして有効なアプローチであることを示唆しているといえよう。

今回の調査は、ディスカッション中の不同意に焦点をあて、分析を行った。今後は、雑談など異なる会話タイプの不同意についても併せて分析、考察し、中間言語の変容を明らかにしたい。また、学習者の言語環境や心的態度の変容について丁寧な調査を行い、習得の個人差について検討する予定である。

**謝辞** 本研究は JSPS 科研費 18K12418 および 21K13032 の助成を受けて行った研究成果の一部です。新型コロナウイルス感染症拡大の中、調査に協力して下さった皆様に、心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- Bardovi-Harlig, K., & Salsbury, T. (2004). The organization of turns in the disagreements of L2 learners: A longitudinal perspective. In D. Boxer and A. D. Cohen (Eds.), *Studying speaking to inform second language learning*, pp. 199-227. Clevedon: Multilingual Matters.
- Bardovi-Harlig, K. & Bastos M. T. (2011). Proficiency, length of stay, and intensity of interaction and the acquisition of conventional expressions in L2 pragmatics. *Intercultural Pragmatics*, 8, 347-384.
- Cook, H. M. (2008). *Socializing identities through speech style: Learners of Japanese as a foreign language*, Bristol, United Kingdom: Multilingual Matters.
- FitzGerald, H. (2003). *How different are we? Spoken discourse in intercultural communication*. Multilingual Matters. (村田泰美監訳 (2010). 文化と会話スタイルー多文化社会・オーストラリアに見る異文化間コミュニケーションー ひつじ書房)
- ピナンソツティクン ポラニー (2014). 日本語熟達度と語用論的能力に関する一考察ータイ語を母語とする日本語学習者の不同意表明からー 小出記念日本語教育研究会, 22, 5-16.
- Schieffelin, B. B., & Ochs, E. (1986). Language socialization. *Annual Review of Anthropology*, 15, 163-191.
- 榎本 総子 (2004). 提案に対する反対の伝え方ー親しい友人同士の会話データをもとにしてー 日本語学, 23(10), 22-33.
- Taguchi, N. & Roever, C. (2017). *Second language pragmatics*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- 宇佐美まゆみ (2011). 改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011年度版 <<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf>> (2022年1月11日)
- 堀田智子 (2017). 中国人日本語学習者の「不同意」行為ーストラテジー使用における語用論的転移の可能性ー 国際文化研究, 23, 95-106.
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: University Press.
- 李在鎬・小林典子・今井新悟・酒井たか子・迫田久美子 (2015). テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較 第二言語としての日本語の習得, 18, 53-69.
- 奥西麻衣子 (2019). 同級生の日本語母語話者との会話に見られる留学生の普通体使用ー言語社会化の観点からー 日本語教育, 172(0), 134-148.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: studies in conversation analysis*, pp. 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- 柳原光 (2003). Creative O.D. : 人間のための組織開発シリーズ 行動科学実践研究会 (プレスタイム)
- 袁姝 (2021). 「不同意表明」が見られる談話に関する一考察ー日中接触場面での課題解決型議論を基にー 言語・地域文化研究, 27, 207-228.
- Yoshimi, D. (1999). L1 language socialization as a variable in the use of *ne* by L2 learners of Japanese. *Journal of Pragmatics*, 31, 1513-1525.